項羽と劉邦

中

司馬遼太郎

新潮文庫

項羽と劉邦（中）

新潮文庫　し－9－32

昭和五十九年九月二十五日　発行
平成八年二月二十九日　四十一刷

著者　司馬遼太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六－五四四〇
読者係（〇三）三二六六－五一一一
振替　〇〇一四〇－五－八〇八
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社

© Ryōtarō Shiba 1980 Printed in Japan

新潮文庫

項羽と劉邦

中巻

司馬遼太郎著

新潮社版

3261

項羽と劉邦

中巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

張良の登場

この間、劉邦の軍は、秦の根拠地の関中をめざして動いているが、北方の項羽の軍ほどにはめざましくない。

ひとつは、両軍のあいだの士卒の強弱がある。項羽軍は楚人という、原始タイ語を用いる種族でかためている。劉邦軍の名だたる軍師であった張良の晩年、すでに皇帝になっている劉邦が、みずから内乱の鎮定のために東にむかったとき、

楚人ハ剽疾ナリ。願ハクハ楚人ト鋒ヲ争フナカレ。

楚人はすばしこくて強うございます。どうか楚人と直接戦闘をまじえることはお避けあそばすように、と注意したことは有名で、体の小さな楚人が死を怖れずに戦場を駈けまわるという種族的印象は、張良だけがそう思っているのでなく、この当時の共通のものであった。

この時期、秦に対しては、項羽軍も劉邦軍も、

「楚軍」

ということになっている。しかしきっすいの楚人は項羽軍に圧倒的に多く、劉邦の軍はその点においても雑軍であった。その兵の大部分は、かつての陳勝に従っていた流民と、死んだ項梁に属していた兵で、かれらはそれぞれ主をうしなって散らばっていたのが、食をもとめて劉邦のもとにあつまってきただけともいえなくはない。

「この大将は強いか」

ということが、かれら流動性の高い兵たちの関心のひとつであった。その強さの内容はひどく具体的で、作戦の能力というよりも怪物じみた体軀、さらには膂力、あるいはひと目みて気の弱い者なら腰を抜かすような魁偉な顔つきを持っていることが条件であり、その点、項羽はいかにも兵を魅きつけるのにふさわしかった。

劉邦は抜群の偉丈夫であるという点ではかろうじて士卒たちを安堵させたが、しかし主将みずから鉾をふるって敵陣におどりこむという個人的戦闘力は持っていない。このため、劉邦軍は、みちみち流民や敗残兵を吸収しつつふくれあがってはいるものの、項羽軍のような圧倒的な膨脹力は持たなかった。

が、劉邦軍にも長所がある。

劉邦という人間がつくり出している幕営の空気が、なんともいえずいきいきしていることであった。

「沛公（劉邦）はまれにみる長者だ」

と、たれもがいう。長者とは人を包容し、人のささいな罪や欠点を見ず、その長所や功績をほめてつねに処を得しめ、その人物に接するとなんともいえぬ大きさと温かさを感ずるという存在をいう。この大陸でいうところの徳という説明しがたいものを人格化したのが長者であり、劉邦にはそういうものがあった。

言いかえれば、劉邦の持ち物はそれしかない。

ふつうなら、その血族集団の経済力と人数が核になって勢力ができるのだが、劉邦は沛の片田舎の農家のうまれで、そういう条件をもたなかった。むろんその生家は適度の自作農であるために兄弟もいるし、相応の経済力もあった。しかし劉邦は実父や長兄からごろつきであるとして疎んぜられていたため、生家そのものを乱世に投げ入れて自分の勢力の核にしてゆくことができず、最初から核を血族外にもとめざるをえなかった。

そのことが、むしろ劉邦を劉邦たらしめたといえるであろう。劉邦は元来、私的な家に根を持とうとせず、若いころから世間に根をもち、世間をいわば家として育ち、友人知己のおかげでめしを食い、四十に手がとどくころまでそのようにして過ごしていたということが、この男の対人関係における「徳」を育てる上で大きかったといえる。

劉邦は戦国期にうまれ、その影響をうけ、二十代の半ばを越えてから秦の統一をその目で見た。戦国というのは呼称こそ殺伐であったが、しかしあらゆる面での社会の成熟のあらわ

れであるといえる。

日本列島では多数の人口がここに住むことが遅かったため、中国大陸より七、八百年遅れて広域社会をふまえた国家ができ、このために戦国期の成立もはるかに遅れた。しかし歴史年代のへだたりを越えて、相似点が多い。

戦国の現出の先駆的な条件は、古代社会にくらべ、農業生産力が飛躍的にあがり、自作農が圧倒的にふえ、ひとびとは農奴的状況から解放され、それをふまえての自立精神ができあがったということを見ねばならない。これによってアジア的な意味での個が成立し、この個の成立からさまざまな思想、発明が、沸くように出てきた。戦国の前時代の春秋期をふくめて諸子百家がぞくぞくとあらわれ、中国思想史上、後代にもない絢爛とした時代を現出するのも、以上のような土壌に由来する。

戦国から秦の崩壊期までを特徴づける「士」の成立も、右の土壌から出ている。この時代の士は、日本の江戸期のような世禄を相続する者をいわない。農民の中から自立して出てくる一種の自由人で、自分の知識と精神が役に立つならば仕え、気に入らねば市井にかくれ、あるいは漫遊して遊士になり、ときには有力者に寄食して食客になったりするが、その生き方は自律的で、自分の徳義でもって進退し、あるいは生死し、かつての時代の奴隷的な隷属根性をいっさい持たない。この稿で、筆者はやがて張良という人物に触れてゆきたいのだが、張良もまたかつての戦国における士の気分を濃厚に継いだ者であり、もしくは項羽に身をよせて軍師になっている范増もまたその出身で、その気分をあふれるほどに代表している者と

いっていい。

劉邦をもって、士の出身といえるかどうか。

士は知識人である。この点で、劉邦はそうではなかった。また文字としての士は仕という文字がそこから出ているように、人に仕えて力を発揮するものであったが、劉邦は若いころから人に仕えようとはしなかった。田地を多く持ち、多数の農民に支配力を持っている豪族かといえばさきに触れたようにそうではなく、徳と侠以外にはどういう力も持っていないという点では、劉邦はやはり遊侠にちかい。

遊侠はその後、世がさだまった時期にすね者として存在するが、戦国からこの時代にかけては、郷村や市井で何がしかの勢力をもつ者は侠の要素をつよく持っていた。

秦の盛時、地方官庁にやとわれた地元出身の吏のなかで、一種の世間的勢力のある者は単なる事務の徒でなく、侠の要素を持ち、地元の仲間たちを保護していた。

本来、中国の農耕社会には王朝など要らないという古代的な無政府主義の気分があり、民衆社会の態様も多分にそうであった。里が、里ごとに里ぐるみ墻を築いて自衛し、父老という住民代表を立てて自治しているかぎり、王朝など不要であり、たとえ必要悪として王朝が成立しても、王朝の重圧感を個々の里村に感じさせないというのが、古代以来、理想的な政治――堯舜の世――とされてきた。しかし実際上、そういう羽毛のように軽く母親のようにやさしい王朝があったためしがなく、苛斂誅求が王朝の常態であり、その王朝自体の害とい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

うのは、王朝が「賊」としている草匪の害よりはなはだしかった。

農民たちは、王朝の害から、どのようにして身をかわし、あるいはその手傷を軽く済ませるかということで腐心してきた。その腐心の代表が「父老」であり、かれら父老たちが恃むあては、王朝から派遣されてくる「官」ではなく、地元出身の「吏」であった。吏といっても、俠心のある吏でなければならない。たとえば沛の町にいたその種の吏が、劉邦の子分である蕭何であり、曹参であり、あるいは劉邦が好きでたまらない夏侯嬰、または任敖などであった。かれらは後代の吏ではなく、それぞれ私的に面倒を見ている農民団を、集落ぐるみでいくつか持っている任俠の親分という秘めた側面を持っている。

劉邦は、その頂点にいる。

本来、拠って立つべき何も持たなかった劉邦がなぜ大組織をなしたのであろう。さらには項羽軍に劣るとはいえ、それに次ぐ軍隊をころがしつつ、目下西進している秘密は何であるのか。

そのことは、じつにわかりにくい。これについては、しばしば学問的考察の対象にさえなった。

西嶋定生氏の論文「中国古代帝国成立の一考察――漢の高祖とその功臣」（一九四九年・『歴史学研究』一四一号）が、その皮切りといっていい。

これに対し、守屋美都雄氏が「漢の高祖集団の性格について」（一九五二年・『歴史学研究』一五八、九号）で批判し、それぞれ充実した成果を得ている。

この二つの論文についての紹介や賛否は省くが、西嶋氏が、劉邦の初期、その身内の組織についての呼称に目をつけたのは、功績といっていい。

中涓、舎人、卒、客

と、その隷属のぐあいが、そういう呼称で分かたれているということである。

中涓というのは、涓人ともいう。本来、国王につかえ、その身辺に侍して掃除をする役目の者で、あわせて取次もする。

家臣というものは元来、豪族の家内奴隷から出ているが、豪族が力を得ると、その身辺に仕える奴隷も豪族の意思の代弁者（取次）として、外界にむかって大きな権力を得る。以上は中涓の本来的な意味もしくは在り方で、豪族でも富家の出身でもなかった劉邦の場合、彼の身辺で使われている中涓の語の意味や内容はそこから派生した別なもののように筆者には思われる。

舎人も、同様である。

この語は古代の周王室においては官職の名称で、王に近侍し、どうやら財務をあつかったらしい。その後、この語は王室から出て一般に豪家の主人に近侍して庶務に任ずる者をいい、戦国のころには、豪族の台所めしを食っている門下という程度の意味にも用いられた。

卒は、本来、しもべのことである。しかし戦国のころ「卒」とよばれる存在は、豪族に扶持されている士のことを言う。

客もまた士である。しかし豪族に身を寄せている者をいい、ときに豪族自身が先生とよんでその学識、精神、技能を敬せざるをえない存在をいう。

これらの用語は、戦国もしくはそれ以前における王侯のごくうちうちの日常生活を執事する職名から出ているが、しかし劉邦の時代には、劉邦のような任侠の親分の身内の呼称にまでつかわれるようになっていたと見るほうが自然でいい。

なにしろ劉邦は、沛の町とその付近で、四十近くなるまで男伊達を渡世としてごろごろしていたために、かれの侠の組織に入ってくる人数が多く、それらの親疎の程度や職分のあり方で、右のように、むかしからある職名をつけて組織化する必要があった。というよりも、任侠家の身内というものは、劉邦一家だけでなく、一般にこういうものであったかもしれない。

さらにこのことを随想風に考えると、日本の戦国時代の、たとえば三河の徳川家の場合などは、中涓、舎人、卒は、ひっくるめて譜代の家来ということになるであろう。徳川家は、家康より数代前、山三河の松平郷にいたときは、土地が山林で、水田をつくる水流もなく、田地もほとんど持っていなかった。山林で兵を養い、野に降り、何代もにわたって水田地帯に勢力を拡大してゆくのだが、そのときの家の政事は、老中、若年寄という独特の職名の者たちが切り盛りした。その職につく者はみな譜代の者にかぎられ、主人の権力を代行するか

わりに食禄は低かった。譜代家も、松平家の勢力が拡大して土地を併呑してゆくにつれて新附の譜代ができ、このため古くから隷属した家の者ほど尊ばれ、安城以来とか、岡崎以来などとよばれたが、最後に家康が天下をとったとき、多くの既成大名を味方につけ、外様大名とした。劉邦軍における客である。徳川家の場合、天下をとりしきるようになっても三河の土豪時代の行政上の職名をそのまま使った。家康自身、死ぬとき、三河以来のしきたりを変えるな、と遺言した。行政上の権力は、古代中国でいう「中涓、舎人、卒」に持たせ、客にあたる外様大名には大封をあたえながら政治には関与させなかった。

家康が、いわば家内奴隷の名残りともいうべき譜代衆を信頼し大切にしたことは以上のことでもわかるが、しかし日本の戦国期の三河の譜代衆の忠誠心というのは主人に対する盲目的な隷属心が結びつきの芯になっている。中国の戦国から秦の崩壊期に存在している劉邦とその身内の関係は、その時代なりに自覚した個人――後代の中国ではこの精神がほろびる――が、侠という相互扶助の精神を糊として結びついているように思える。といって侠が高度な精神というのではなく、王朝がたのむに足りず、むしろ虎狼のような害があるという古代的な慢性不安の社会にあって、下層民が生きてゆくにはたがいに侠を持ち、まもりあう以外にないというところから発生した精神といっていい。

そういう劉邦組織の中涓、舎人、卒たちが、この組織が巨大になるにつれてそれぞれ戦国の諸王国がもっていた官職名――将軍、都尉、騎都尉、左司馬、車司馬、騎司馬、御史、太僕など――

を称し、車が旋回するようにこの軍事組織をそれぞれの職分によって旋回させるにいたる。

そのことは、このあたりでとどめる。

張良のことである。

張良、字は子房という。劉邦とその身内たちの出自が揃いもそろっていやしいのに対し、張良ばかりは異例であった。張良はやがて劉邦の「客」になり、軍師に任じ、いくさに弱い劉邦軍の運動を、ともかくも勝利の方角へ形づけてゆくことになる。

張良は、韓の人である。

韓というのは戦国七雄とよばれた国のひとつで、現在の山西省の南東部から河南省の中部にかけての肥沃な中原の一角を占めていた国だが、戦国末期になると、もっとも防衛しにくい国になった。国境線が、一方では不断の膨脹政策をとっている強秦に接し、一方では多分に蛮性をのこした楚に接しているために外交に苦渋が多く、戦いはつねに苦戦であり、これらの宿命的な外圧のために内政の緊張が絶えまなかった。

韓がおかれたこういう環境というのは、国家とは何かという根源的なことを思索する思想的土壌をつくる結果になったともいえる。張良より半世紀ほど前のひとに、この国の王族の中から韓非子（韓非）が出ているのである。

韓非子はいうまでもなく法家思想の大成者であったが、かれの思想とその国家学は韓の内部的現実の中からうまれたといっていい。

韓だけでなく、この大陸の戦国諸国の国家権力は、猥雑とさえいえるほどに多様な諸勢力の利害が辛うじて嚙みあう接点の上に出来ている。韓非子はそれらの動物の内臓のようになまなましい現実を一掃し、法と能力だけで君主権を運営すれば韓もまた亡ぶことがないと考えた。

自然、かれは、儒家を思想上の敵とした。

この当時のこの大陸の世間（その後もそうだが）は、十八、九世紀で成立する近代国家とはむろんちがっている。まず君主のそばに中涓、舎人などの近習がいて、君主を籠絡し、君主権を自分の私的利益の基準で運営している。大臣たちも個々に勢力を持っていてその勢力の利害から物事を判断し、また商工の民（当時は非生産的な遊民とみられていた）はこれらと結託し、私利をはかり、十九世紀以後の感覚でいえば国家ぜんたいが汚職のかたまりのようなものであった。それはそれなりに太古以来の秩序と倫理があり、むしろそうあることが父兄や血族、地縁の長老などに対して礼にかない、孝でもあるということで、この時代の儒教教団はそれを大肯定した上で倫理学をつくりあげていた。

韓非子は、このように血縁、地縁の調整の上に辛うじて成立している君主権ではその働きが小さく、いざというときには命令権も指揮権もすみずみまでとどきにくい、という基本的な疑問の上から、法をもって単純明快に世を治めるという法家の思想を築いた。一方においてかれの思想をいやが上にも透明にする働きをしているのは、哲学的にも政治的にも一種の虚無思想といえる老子の思想であった。老子は政治において無為の道を説いたが、韓非子は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton